



TITLE:

巻頭言

AUTHOR(S):

今井, 尚生

---

CITATION:

今井, 尚生. 巻頭言. ティリッヒ研究 2005, 9: 1-2

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57640>

RIGHT:

## 巻 頭 言

第 19 回国際宗教学宗教史会議世界大会（IAHR 東京大会）は、2005 年 3 月 24 日～30 日の 7 日間、高輪プリンスホテルを会場として開催された。今回の『ティリッヒ研究』第 9 号は、この世界大会において「ティリッヒと平和の神学」という題で企画されたパネルでの発表を論文にしたものである。

今回のパネルが計画されたそもそもの発端は、ティリッヒの論文集　ロナルド・ストーン編／芦名定道監訳『平和の神学　1938-1965』（新教出版社、2003 年）の共同翻訳にある。今回の執筆者である近藤剛氏、前川佳徳氏、岩城聡氏、高橋良一氏の 4 名は、この論文集の主要な部分の翻訳に携わった。そのことが契機となり、ティリッヒの平和思想に関する問題意識、および研究を深めていった。折しも、このたび開催された世界大会のテーマが「宗教　相克と平和　」であったため、「ティリッヒと平和の神学」のパネルは、大会テーマに相応しい企画になったと考えている。

パネルの構成は、近藤氏と高橋氏がティリッヒの平和思想に関する基礎的問題を　前者は正義、後者は希望の概念の分析を基礎にして　取り上げ、岩城氏と前川氏は、それぞれ民族問題と科学技術の問題という応用的問題を取り上げた。また、芦名定道氏にコメンター役を務めて頂き、今井がコーディネーターを引き受けた。

ティリッヒの思索および議論は、常に境界線上（on the boundary）で展開されるところにその特徴があるのはよく知られている。平和の問題において境界線上に立つということは、ユートピア的な理想主義でもなく、シニカルな現実主義でもない第三の道、「信仰的現実主義」を摸索するという形で展開された。このティリッヒの見出した道が、如何なる根拠と論理に基づくものなのか、また今日の平和の議論に如何なる有効性を持ち得るものなのか、各氏の論文はこのような問題の解明に意欲的に取り組んだものと言える。本論集が、この方面におけるティリッヒ研究に寄与するものであることを願ってやまない。

西南学院大学助教授

今井　尚生

The 19<sup>th</sup> World Congress of the International Association for the History of Religions

Types of Presentation: Organized Panel

General Title: *Tillich and Theology of Peace*

Session Number: 13U, Panel Number: 0033 (29 March, 11:00-13:00)

パネル「ティリッヒと平和の神学」組織者

今 井 尚 生

要旨

混迷を深める今日の世界情勢の中で、ティリッヒの平和の神学は我々に如何なる示唆を与えてくれるだろうか。ティリッヒの平和に関する思想は、他の思想と同様、境界における思想である。彼特有の思索の分析を基に、現在に生きる我々が希求し得る平和についてパネルでは議論を深めていく。パネリストはティリッヒ著『平和の神学』を邦訳したメンバーによって構成され、その翻訳を通して掘り下げられた問題意識に基づいて、その後研究を重ねた成果を発表する。パネル内容は、ティリッヒの平和の神学に関する基礎論とその現代的応用に関する議論によって構成される。基礎論に関しては、理論的問題および基礎概念の分析特に希望の概念分析を含み、現代的応用に関しては、科学技術論、ナショナリズム論、そして彼の信仰的現実主義などについて議論が展開されるであろう。

Summary

What can Tillich's theology of peace suggest to people living in today's confused world? His distinctive concept of peace was based on the idea of "boundary" as well as his thoughts on other subjects. The panel will discuss problems of peace in the contemporary world in light of an analysis of Tillich's ideas. The panelists are the members who translated Tillich's *Theology of Peace* and have addressed the problems of peace. The panel will include two kinds of studies. One is a fundamental study, which deals with the theoretical problems of Tillich's theology of peace and the analysis of key concepts, such as hope, creative justice, etc. The other is a practical study, which deals with nationalism in general and particularly in Japan; ST, or science and technology; *Gläubiger Realismus*, which is the foundation of Tillich's theology of peace, etc.